

当館では『作品そのものを自分のものとしてみてほしい』という願いから、この10年来対話型鑑賞に取り組んできた。いち早く対話型鑑賞に興味を持った学芸員が、ボランティアスタッフとともに地道に研修をしながら取り組み、平成18年には、アメリカ・アレナス監修の「Mite おかやま!!」を開催し、当館のボランティアスタッフだけでなく、県内の学校関係者や美術館関係者、さらには一般の方にもV T研修への参加を呼びかけ、広く普及するきっかけとなった。しかし、このような広まりの一方で、ナビゲーターのトークスキルの問題、そしてそこから派生したV Tに対する誤解や混乱が生まれてきているという現実がある。

鑑賞者の発言がなくなったとき、ナビゲーターが一方向的に話し出す、あるいは、鑑賞者が作品そのものをみることができていない段階で情報の垂れ流しをしてしまうという現状がある。また、V Tは、「情報は与えない、必要ない」という誤解がもとで、鑑賞者が作品そのものをみるということを行っていくと、自然に発生してくる「知りたい」という欲求に十分答えられていないという現状があげられる。

V Tが従来にない鑑賞法として日本に導入され、表面的なことだけが一気に普及したことによって、このような誤解や混乱が生じ、V Tの本質ではない部分が横行してしまったように思う。

今回は、V Tの基本に立ち返り、「作品をみる」ということを様々な立場から鑑賞に関わっている人たち、ボランティアスタッフとして、学校教育現場の図画工作・美術科担当教員として、あるいは、教員養成課程を受け持っている大学の先生、さらには、今後美術館教育や学校教育に携わることを志している学生と一緒に考える機会にしたいと思い、本研修を福さんに依頼した。

研修参加者は、V Tについて少なからずの知識は持ち合わせているが、実際にナビゲーターとして活動をしている人ばかりではない。また、ナビゲーター歴、スキル能力等まちまちである。

福さんの研修レクチャーは、解釈の創造性であったり、対象に対する鑑賞者の好みや妄想、誤解があることの面白さから始まった。そして「作品は、ものでしかなく、作品をみる人と作品の間に起こる不思議な現象、深淵で素晴らしいコミュニケーションこそがアートであり、鑑賞者のみという行為がアートを生み出している」ことにふれ、V Tで作品をみることの意義を参加者が体感できる、深い内容へつながっていった。ナビゲーターの経験の有無に関わらず、またスキル能力に関わらず、参加者一人ひとりが「作品を自分のものとしてみる」ことの重要性を認識、あるいは再認識し、そしてベースの部分の共有を参加者全員で図ることができた。

今回の研修打ち合わせでは、「きく」ということが何度も話題となり、研修内容も「きく」ことの重要性に、参加者自身が体感して気づく内容となっていた。

日本国内、特に学校教育現場で「コミュニケーション能力の育成」が叫ばれるようになって久しい。よく「コミュニケーション=キャッチボール」という言葉に例えられる。多くの人々が、キャッチボールからイメージするのは「スローイン」である。しかし、キャッチボールは、スローインだけでは成立しない。スローインとキャッチがあって初めて成立する。これをコミュニケーションに置き換えると、「コミュニケーションは、スローインだけでは成立しない。スローインとキャッチがあって初めて成立する」となる。多くの教育関係者が学校現場で行っていることは、「コミュニケーション能力の育成=プレゼン能力の育成」となっていないか。話すことは確かにできるようになってきているが、「きく」ことは・・・？コミュニケーションについて、まだまだ認識不足であったことに気づく機会を得ることができた。

さらに、VTの中でいうコミュニケーションは、ナビゲイター対鑑賞者の1対1のキャッチボール的コミュニケーションではなく、ナビゲイターと鑑賞者、そして鑑賞者同士とのコミュニケーション、例えるなら「バレーボール的コミュニケーション」であるという表現がなされた。今回の研修はVT研修で、ナビゲイターに軸を置いた研修のつもりであったが、ナビゲイターが「きく」能力が必要なと同時に、鑑賞者自身も「きく」能力が求められるということを感じた。よい鑑賞者の育成は、ひいてはアートがこの世界に存在するための根幹であるといえるのかもしれない。

さて、VTのナビゲイターをするにあつたポイントとして、「みる」「問いかける」「聞く&考える」「コメント」「言い換える(パラフレイズ)」「結びつける(コネクト)」「情報をあげる(インフォメーション)」「まとめる(サマライズ)」等があげられた。これは、今現在ナビゲイターを実践している多くの方が理解し、取り入れ実践しようと日々努力していることである。次の壁は、「どのタイミングでコメントをし、言い換え、コネクトしたらいいの？」または、「必要な情報を的確に与えることがみるにつながることは理解できるが、どのタイミングが的確なの？まとめ方は？」という段階である。よくこの壁にぶち当たった人は、「これを教えて欲しいの」と言われる。このタイミングにセオリーはない。それは、作品をみるという行為が、シナリオのない、リアルタイムで起こるガチンコ勝負だからである。今回の研修で、これを打開する術こそ「きく」ことであるということを知った。相手が(鑑賞者が)、何を言わんとしているのか、今この作品をみながら、この場でどういうことが起こっているのかを的確に判断すること、すなわちナビゲイター自身がきいて考えること(これは、鑑賞者一人ひとりも同様である)ができれば、自ずとみることを促す、あるいは深めるコメントや情報の提供、言い換えやコネクトができるはずである。そのタイミングに「！」とくるはずである。

しかし、この「きく」が実際にはいかに難しいかということを感じている。研修後、私自身積極的にナビゲイターに携わるよう努め、また、観察者として多くのナビゲイターを観察し続けている。さらに、この夏は小中学生鑑賞教室事前研修を含め5つの研修を先生方と一緒にいった。今感じていることの一番は、多くのナビゲイターが一見きいているようで、実は、勝手に自分の中で「言葉を置き換えてしまっている、自分の物差しで都合のいいように聞いている」ことがなんと多いことか、ということである。

VTの奥は深い。VTが日本に入った当初、多くの人がこの鑑賞法に新しい鑑賞の方

向性を見つけ、取り組んだが、この奥の深さ故に、挫折や方向転換をよぎなくされたことであろう。あるいは、表面的なことだけを習得したと勘違いをして、勘違いのままにVTを行っている人たち、あるいは、表面的なことだけを受け取って見切っている人たち、そういう誤解や混乱が、少しでも解消され、VTの本質が多くの人に広まっていくことを願ってやまない。

もしかすると、VTは、美術館の存続の一つの方向性を示してくれるものになりうるかもしれないと思う今日この頃である。だからこそ、私自身、いつも素で作品と鑑賞者に向き合い続けていくために研鑽を積んでいきたいと思っている。

美術は、人類の歩みそのものである。人類が今までに磨いてきた英知が詰まっている。知識、技術、哲学、その時代の社会の価値観が反映されている。美術は常に時代毎に価値が変わる善と悪、美と醜、こられ相反することに人類が真っ向から向き合い対峙し、表現してきたもの、これから表現していくものである。だからこそこれら美術は、鑑賞者の知的好奇心を大いにくすぐる要素を多分に持ち合わせている。美術館は、鑑賞者の知的好奇心を大いにくすぐるだけの展示ができているのか。そして、そこで鑑賞者と作品の間に起こる不思議な現象、深淵で素晴らしいコミュニケーション、すなわちアートを生み出す場となっているのか。それを鑑賞者に感じてもらうことができ、初めて美術館は、美術館の存在意義を確固たるものとするのではないか。箱物と揶揄される美術館が、鑑賞者の知的好奇心を大いにくすぐる（福さん曰く）“知的ワンダーランド”となりうるかどうか、美術館の存続に関わってくるのではないだろうか。